

注意 字数が指定されている設問については、「、」や「。」も一マス使いなさい。答えはすべて解答题用紙に記入しなさい。

1

① 次の(1)～(6)の四字熟語の空欄に入る漢数字をそれぞれ答えなさい。

- (1) 一期() 会 (2) () 束三文 (3) () 戦錬磨
(4) 三寒() 温 (5) 四方() 方 (6) 千客() 来

② 次の会話文を読み、(1)～(4)の空欄に当てはまる最も適切な語を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

【田中】 普段は藤井さんと仲が良いのに、昨日はかなり厳しい口調で注意していたね。どうかしたの。

【小林】 藤井さんとは、いつも一緒に過ごしている仲だけど、部活動の朝練習に遅刻することが最近すごく多くて。いくら注意しても(1) () なんです。ついで頭に来て言い過ぎちゃって。

【田中】 小林さんの気持ちはとても理解できるよ。

でも、口は(2) () の元。いくら親しい相手でも言い方には気をつけた方がいいよ。

【小林】 つまり、親しき仲にも(3) () あり、ということですね。

実は私も帰宅してから、ついつい言い過ぎてしまったなって反省していました。今から藤井さんに謝っても、許してもらえないと思うけど。

【田中】 そんなことないよ。藤井さんは(4) () 性格だから、素直に謝れば、きっと許してくれるよ。

- (1) ア 馬が合う イ 河童の川流れ
ウ ぬかにくぎ エ 光陰矢の如し
(2) ア なりわい イ にぎわい
ウ ねぎらい エ わざわい
(3) ア 方便 イ 節度
ウ 礼儀 エ 破竹
(4) ア 竹を割ったような イ 爪に火をとます
ウ 口が減らない エ 舌を巻く

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人間というのは時間とともに、いろいろなタイプの生活者であることを遍歴する。例えば、①一五歳と四五歳と七五歳の大月君は、同じDNAをもち、同じ名前と呼ばれ、同じ戸籍に登録されながら生きていくに違いないが、年齢によってその生態がかなり異なることは②ヨウイに想像がつくだろう。もちろんその時々で、住宅への要望や住宅をとりまく町に対する要望が、かなり異なってくるのである。

例えば、一五歳の大月君はプライバシーの高い部屋を望んでいる。あまり親に干渉されたくないの、ダイニングにもリビングにもあまり顔を出さない。そのかわり、学校の帰りに寄り道できるゲームセンターやコンビニ、いろいろな都会的な商品を豊富にそろえているお店や、多少遅くまで遊んでも怒られない友達の家といった環境を、町に欲している。

例えば、四五歳の大月君がほしい住宅は、女房子どもから干渉されない③シヨサイがあることだ。でも、子どもには自分の部屋に引きこもってほしくない。そのかわり、ダイニングやリビングは家族でにぎわっていてほしい。たまに、自分で釣ってきた魚を料理して、人でも呼んで振る舞ってみたい。町には、ちよつと一杯ひっかけることのできる④な馴染みの赤ちようちんがあれば素敵だ。あるいは休みの日に、一人でもほつとできる気の利いた⑤喫茶店があればなおよい。

例えば、七五歳の大月君は、そろそろ体がいうことをきかなくなってきた。住宅が広いと掃除も大変だけど、狭くていろいろなモノが転がっていると転倒の危険がある。部屋もモノも整理してコンパクトを心掛けなければならない。そして人間関係も、そろそろコンパクト化しなければならないかもしれない。でも、娘がたまに孫を連れて遊びに来るときは、思いつきりはしゃいでもらえるような部屋の広さは必要だ。家の外は静かな方がいい。歩いていける図書館などがあって、朝はのんびりそこで新聞など読んで、顔見知りの人と少しだけ世間話をして、帰りに気の利いた喫茶店にでも寄って帰ることができればいい。そして、自分や妻に何かあったとき困らないような、安心な病院、*サ高住、有料老人ホーム、*特養が、一通りそろった町になってくれれば安心なのだが。

こんなふうには、同じDNAをもった人間でも、年頃に応じて、住宅や町へ要望することはころころと変わるものである。住宅や町は、このように大変 A に遍歴する人間の要求の変化を、タイミングよく受け入れなければならない。

住宅については、増築したり、リフォームしたり、引っ越ししたりして、自分の要求に近いところにもっていくことができる。しかし、町の方は、基本的には引っ越ししなければ、自分のニーズには合わない。ただ、「⑥住めば都」という言葉があるように、一つ所に我慢せずと住んでいれば、だんだんと⑦町の環境に、自分自身のニーズがシクロしてくる場合もあるだろう。これは、人間の方が町の環境に適応していくという側面もあるだろうが、逆に、町の方が時間をかけて人間の要求に合わせて変化してくるという側面もあるのではないだろうか。時とともに、町がそこに住む人びとのニーズの変化に応じて変わってくることだってありうる。あるいは、行政にそれを要望して、時間をかけて実現する場合もあるかもしれない。

最初から町が多様な種類の人間によって住まわれていけば、その町はそれぞれの年頃の人に対して多様なニーズに応えざるを得ないのだろうが、新規開発された多くの住宅地ではそれは望めない。そうした町は必ず「三五歳と生まれたて」の要求を満たすようにつくられる。もつといてしまえば、彼らの要求のみを満たすようにつくられるのが普通である。

ただ、居住者たちが歳を重ねていくにつれ、町に要求される事柄も変化する。このことを通じて、町も少しずつ変わっていくということもある。ここで居住者のニーズが多様に変化することができれば、町も多様なニーズに応えるように歳を重ねるに違いないが、これまでに見てきた⑧モノトーンの住宅地では、居住者のニーズが変わっても、それはニーズのピークがシフトするだけである。わかりやすい例でいえば、町がはじまった当初は、保育園だの小学校だのが足りないが、三〇年もすれば、学校は統廃合され、空きビルとなる一方で、高齢者サービス施設が足りなくなるといった現象にしか

ならないのである。

こうした意味でも、町自体が多様化するように歳を重ねるためには、居住者自身の属性も多様化しなければならないし、もしこうしたことが望めないなら、その町はその支配的な年齢層以外の人びとのニーズを受け入れられずに、滅びていくことになりかねない。

逆に、そこで時間を重ねて変化していく人びとの多様なニーズを丁寧を受け止めながら町が成長していくことができれば、その町は「生活の薬箱」ともいえるような環境となるだろう。

人間は生活上の課題を、いろいろな方法で解きながら、日々の生活を送っている。時にはその課題を、町がもっている機能で解決してくれることもあるだろう。例えば、一五歳の大月君にコンビニやゲームセンターを提供してくれたり、四五歳の大月君にほっと息のつける赤ちようちんを提供してくれたり、七五歳の大月君には毎朝寄れる図書館を提供してくれたりすることだってあるだろう。娘夫婦が孫を連れて近くに移り住んでくれるのも、歳老いて何かあったときに安心なサービスが提供されるのも、町がもっている機能によって生活課題を解くのを手伝ってくれているからだと考えてすることもできるだろう。

人は町の中の空間や町に住む人びとの中に、⑩ある種の資源を発見して、それを利用しながら自らの生活課題を解決していく体験を積んでいく。そうやって長年、町に助けられながら暮らしている人びとにとっては、「そういうときはここに行くもんだ」とか、「そういうときには誰々さんに相談すれば解決するんだ」というような、解決のための薬が町のあちこちに点在していることが体得されてくる。ある人にとって、時間をかけて町全体があなたかも薬箱のような存在になること、そのことをもって、我々は「住めば都」と表現するのだろう。

『町を住みなす』大月敏雄

*サ高住・・・サービス付き高齢者住宅。

*特養・・・特別養護老人ホーム。

① 傍線部㉑・㉒・㉓の、カタカナは漢字に直し、漢字は読み方を答えなさい。

② 「㉔一五歳と四五歳と七五歳の大月君は、㉕年齢によってその㉖生態がかなり異なる」とあるが、I「一五歳の㉗大月くん」と II「四五歳の㉘大月くん」とは、「㉙ダイニングや㉚リビング」をどのような場所だと考えているか。解答欄に合うように、本文中の表現を用いてそれぞれ三十文字程度で答えなさい。

③ A に当てはまる語として最も適当なものを、次から一つ選び記号で答えなさい。

ア わがまま イ 穏やか ウ 遠回し エ 軽やか

④ 「㉛住めば都」の意味として最も適当なものを、次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 住むのであれば便利できれいな都会のほうがよい。
イ どんな所でも、住み慣れるとそこが居心地良く思われてくる。
ウ 自分がその場所、その町の中心人物になれば住みやすい。
エ 住んでいる場所には都会の要素が必ず含まれる。

⑤ 「㉜町の環境に、自分自身のニーズがシンクローしてくる」に対する筆者の考えを八十字以内で抜き出し、最初と最後の五字で答えなさい。

⑥ 「㉝モノトーンの㉞住宅地」とは、どのようなものだと考えられるか。本文中の語句を用いて三十五字以内で答えなさい。

⑦ 「㉟ある種の資源」を言い換えた部分を本文中から七字で抜き出して答えなさい。

3 三月十一日、㊱早苗と㊲慎也が住んでいた町を地震と津波が襲った。二人は中学校の卒業式を終えたばかりで、慎也はその日の午後海へ出かけたきり、行方不明になった。三月から四月にかけて、慎也の両親は毎日のように海岸に通いつづけ、避難所を回り、遺体安置所になった体育館にも顔を出した。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

慎也の父親の修太さんは、遺体が発見されるたびにうめくような叫び声をあげて、担架を運ぶ隊員のもとに駆けていった。何日も通い詰めていると顔なじみの隊員もできる。修太さんが担架に取りすがる前に、息子さんではありませんよ、と I かぶりを振る隊員もいた。

由美さんは違った。決して駆け寄らない。「A」遺体を探しに海岸に来ているわけではない。元気なままの慎也がどこからか、ふらっと姿を見せる瞬間を楽しみにして、迎えに来ているだけなのだ。帰り道には無口になる修太さんとは逆に、由美さんはむしろ家が近づくとき II 。留守中に慎也が帰ってきているかもしれない。「お父さんもお母さんもどこに行ってたんだよ」と、ぶんぶん怒りながら、ダイニングでありあわせのものを頬張っているだろうか。それとも、疲れきって帰ってきて、自分の部屋のベッドで寝入っているだろうか。どちらでもいい。どんな「たぐいま」でも心の底からうれしい。玄関の鍵は、そのために、いつも開けてあった。

五月に入った。

三月の頃にはどこから手をつければいいかわからなかった㊳瓦礫の山も、だいぶ片づけられた。体育館に安置されていた遺体は身元がわかったものから引き取られていき、避難所生活を送るひとたちの数も、少しずつ減ってきた。

慎也はまだ帰ってこない。手がかりになりそうなものも見つかっていない。生きて帰ってくる可能性は、もうほとんどないだろう。親戚の中には「葬儀だけでも早くあげてやって、慎也を成仏させてやらないと」、「B」かわいいそうだ」と言うひともあるし、修太さんも海岸からは足が遠のいてしまったが、由美さんはどうしてもそれを認めない。

慎也はいまも書類上は高校に㊴ザイセキしている。ただし一年二組の教室に机はなく、先生が出席をとるときにも慎也の順番は最初から抜かすようになった。それが、慎也が一度も通うことのなかった高校が選んだ現実だった。

由美さんの決めた現実では、慎也は亡くなってはいない。この世界のどこかにいる。いまはその居場所がわからず、連絡がつかないというだけのことなのだ。

「わかってるのよ、おばさんだって」

早苗の母親の理津子さんは言う。

「理屈ではわかってるんだけど、親の気持ちは理屈だけじゃすまないの」

理津子さんと由美さんは、産婦人科医院のマタニティ体操教室以

来の付き合いだった。「母親」としての歴史を一緒に歩んできたことになる。

由美さんは理津子さんの前では本音を素直に語るし、理津子さんも、ときどき夜遅く由美さんからかかってくる長電話に⑩辛抱強く付き合っている。

その電話で、由美さんは泣きながら訴えた。

慎也の部屋に【C】入れない。

窓を開けて風を入れ、いつでも慎也を迎えられるようにしていても、部屋を片づけたくはない。しわくちやのベッドのシートも、脱ぎ捨てたパジャマも、イジェクトボタンを押してソフトが半分外に出たゲーム機も、かけらの残ったポテトチップスの袋さえ、そのままにしてある。

部屋を片づけると、自分の気持ちまで整理されてしまいそうで怖い。

「部屋と一緒に？」

早苗がきき返すと、理津子さんは「そういうものだと思うよ、ひとの心って」とかすかに笑った。「だから、それでいいのよ、って言うてあげただけだね」

「ずっとそのままってわけにはいかないんじゃないの？」

「うん、いかないよね」

「だったら……」

「それはおばさんにもわかってるんだってば。わかってるんだけど、どうしようもないの」

「だから、気持ちを整理して……」

「そんなことしたら、ぜんぶ終わっちゃうじゃない」

「でも、おじさんやおばさんだって、これからのこと考えなきゃいけないんだし、なんていうか、前に進まなきゃ、って」

「もういいから、あんた黙ってて。親子とか夫婦とか、そういうのって、割り切れることばかりじゃないだからね」

叱られてしまった。子どもにはまだわからない、と突き放されたような気もする。

でも——と、早苗は思う。

どうしようもないのはこっちのほうだよ、と言いたい。

慎也がいなくなってしまったのは、とても悲しい。それはもう、間違いない、ほんとうのことだ。

けれど、その悲しみは、落ち着く先が見つからないまま、胸と喉のはざまにつつかえるように浮かんでいる。中学時代の友だちにきいても同じことを言っていた。

亡くなった、と決めてくれたほうがいい。

⑪キセキを信じるには月日がたちすぎている。もう二度と会えないんだ、と思わせてほしい。あきらめさせてほしい。

そうすれば、思いつきり泣いてあげられるのに。

慎也に対して幼なじみ以上の感情を抱くことはなかったものの、だからこそ、男子や女子の区別がほとんどない幼い頃に戻って、わんわん泣くことができるだろう。

⑫現実にはありえないような細かい希望を大切に守りすぎて、きちんと悲しむことができないというのは、やっぱりおかしいと思う。心の底から悲しませてほしい。無念と悔しさいっぱいのお別れをさせてほしい。

お墓参りもしたい。仏壇にお線香だってあげたい。なにより、お

つちよこちよいで元気だった慎也の思い出を、みんなで話したい。なつかしい話は尽きないはずだし、【D】最後にはみんな泣いてしまうはずだ。

そのほうが慎也も喜んでくれるだろうし、ありつたけの涙を振り絞って流したあとは、こっちの気持ちもすっきりするだろう。

理津子さんにその思いをぶつけてみた。

なるほどね、と理津子さんは小さくうなずいてから、⑬まつすぐ

に早苗を見据えた。

「慎也くんでも誰でもいいんだけど、津波で亡くなったひとは、あなたをすっきりさせるために亡くなったわけじゃないからね」

ぴしやりと言われた。

由美さんが早苗を訪ねてきたのは、六月十一日——あの日からちょうど三カ月目の夕方だった。

「これ……慎也がずっと借りっぱなしだったのを思い出したから」
玄関で差し出されたのは、高校入試で出題された小説の単行本だった。

「入試のあとで貸してもらったのよね。ごめんね、いままで忘れてて」

「……わたしも忘れてました」

⑭小さな嘘をついた。ほんとうは覚えていた。きつと慎也の部屋のどこかに置いてあるのだろうと思っていたから、その本のは自分から口に出すつもりはなかった。

「昨日、慎也の部屋を片づけてたら、ベッドと壁の間に落ちてたの。寝る前に読んで、そのまま枕元に置いてただけど、寝てるときに手かどこかがあたって、隙間に落としちゃったんだと思う。ひとに貸してもらった本なのに、なにやってるんだろうね、ほんと」

あいつならありうる、と笑い返す前に、うそ、と声が漏れそうになってしまった。

部屋を片づけた、と由美さんは確かに言った。ベッドと壁の隙間に落ちた本を見つけるぐらいだから、窓を開けて空気を入れ換えたという程度ではなかったのだろう。

「あの子、小説なんてほとんど読んだことないのに、見栄張って、こんなに分厚い本借りちゃってねえ。ほら早苗ちゃん見てよこれ、全然読んでないんだから」

しおりの挟まった頁を広げて見せた。

(中略)

三月十日の夜、ベッドで眠りに⑮就く前にしおりを本に挟んだとき、慎也は翌日の午後に自分を待っている運命には気づいていない。しおりを本に挟むというのはそういうことだ。一番小さな未来を信じた証が、薄いひとひらのしおりなのだ。

明日、また——。

また、明日——。

あの夜も、数えきれないぐらいたくさんひとが読みかけの本にしおりを挟んで眠り、それきりになってしまったひととたくさんいるのだろう。

⑯しゃくりあげながら、小説を最初から読んでいった。章ごとに語り手の替わる作品だった。入試に出題されていたのは第三章の一部だったが、慎也が読んだ第一章は、一見すると、そこはなんの関係もなさそうなパートだった。

つまらなかつたかもね、と涙を拭うのを忘れて笑う。

ばらばらめくってみた感触では、ストーリーは第二章から勢いがついている様子だった。

十日の夜のうちに頑張って第二章も読めばよかったのに、と涙をすすする。そうすれば、続きが気になって釣りをやめていたかもしれないのに。涙がまた目からあふれる。泣いても泣いても、Ⅲ なんかしない。考えてもしかたのない後悔が、どうしようもないことはわかっているのに、次からつぎへと湧いてくる。

第一章を読み終えた。

①早苗は挟んであつたしおりをはずし、小さく息を継いで、涙で文字がにじんで読み取れない白い頁を、ゆっくりとめくった。

『しおり』重松清

⑩ 「①早苗は挟んであつたしおりをはずし」とあるが、しおりは

本を読んでいる人にとって何の象徴であるか、早苗は気付いたのか、本文中から十二字で抜き出しなさい。

4 世界で活躍する日本人を一人挙げ、あなた自身がその人から学

んだことを百五十字以内で書きなさい。

① 傍線部①、②、③、④のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方を答えなさい。

② 【A】 【D】に入る語として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を複数回用いてはならない。

ア きつと イ そもそも ウ かえって エ なかなか
③ I に入る語句として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 得意そうに イ 落ち着きはらって
ウ 申し訳なさそうに エ 満面の笑みで
④ II に入る慣用句として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 胸を痛める イ 胸がつぶれる
ウ 胸を打たれる エ 胸がときめく
⑤ 「④現実にはありえないような細かい希望」とは、どのようなことについて言っているのか、二十字程度で答えなさい。

⑥ 「⑥まっすぐに早苗を見据えた」とあるが、この時の理津子さんの気持ちの説明として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 早苗の気持ちを理解しながらも、それは自分本位な考え方であると指摘しようと思っている。
イ 早苗の意固地な態度にあきれ果てて、これ以上話してもらちが明かないと思っている。

ウ 早苗の論理的な主張に感心して、精神的に成長した娘のことを誇りに思っている。
エ 早苗の反抗的な態度にひどく腹が立ったが、それを悟られたくないと思っている。

⑦ 「⑦小さな嘘をついた」とあるが、早苗はなぜ嘘をついたのか、その理由を五十字程度で答えなさい。
⑧ 「⑧しゃくりあげながら」とはどのような様子か。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 本のページを勢いよくめくっていく様子。
イ 開いた本を両手で高く持ち上げている様子。
ウ 興奮して思わず大きな声を出してしまう様子。
エ 息を何度も吸い上げるようにして泣いている様子。

⑨ III に入る適当な語を、本文中から四字で抜き出しなさい。

